

## ポスト京都交渉における目標設定をめぐる駆け引き

地球環境ユニット 省エネルギーグループ 研究員 和田 謙一

### サマリー

2008 年末にポーランドのポズナンで開かれた一連の UNFCCC 会合は、アメリカが政権末期にあったことや、景気の悪化が EU にも影を落としていたことから、全般的に議論のモメンタムを欠いていた。次期枠組み交渉の焦点である先進国、途上国それぞれの目標や行動についてもまだ本格的な交渉には至っておらず、特筆するような成果も乏しい。しかし、交渉テーマや各国のスタンスを仔細に見ていくと 1 年後のコペンハーゲン会合を視野に入れた駆け引きが繰り返されていることがわかる。

次期枠組みに向けた交渉の場として AWG-KP（京都議定書における附属書 I 締約国の更なる約束に関するアドホック・ワーキング・グループ）と AWG-LCA（条約における長期的協力行動に関するアドホック・ワーキング・グループ）の 2 つが用意されている。しかし、これらは必ずしも歩調をあわせて進んでいるというわけではなく、むしろ議論のスピードやアプローチに大きな違いがある。

本稿では、ポズナン会議までに行われた目標設定に関する一連の議論を振り返りつつ、AWG-KP と AWG-LCA の検討内容と進捗にどのような違いがあり、なぜそのようなギャップが生じているのか、その含意は何かを考察した。その結果、AWG-KP の議論は、EU が域内で行った目標設定の方法をなぞる形で進みつつあるのに対し、AWG-LCA では、アメリカや途上国を含めた形でより多角的な議論が行われていることがわかった。しかし、今後は AWG-KP と AWG-LCA の作業が統合されるケースも想定されることから、アメリカ新政権の出方次第では交渉の流れが大きく変わる可能性もある。